

東
北
大

きょうかん

発行
東北大学教育学部
関東地区同窓会
事務局
〒154-0015
世田谷区桜新町2-21-1-309
(今野正保方)
電話 03-3420-5374

近づく創立一〇〇周年

教育学部関東地区同窓会会長 家根敏明

教育学部関東地区同窓会の会報は通例総会の開催年に隔年で発行する慣わしであります。とりあえず会員の皆様にご報告申し上げておきたい事項につきまして会報増刊号としてお送りさせていただきます。

さて余すところ二年足らずに迫りました東北大学創立一〇〇周年の記念事業は関係各分野の努力によって意欲的に進展を見ているようでありますが、我々関東地区在住同窓生の身近なところでも注目すべき企画が展開されています。大手町日経ホールで今年一月からスタートした「創立一〇〇周年記念セミナー」は来年二月までの五回シリーズで「科学が次ぎの一〇〇年で作り出せること」を基本テーマに最新の先端技術や学術研究の迫力ある発表や討論が行われ、毎回好評を博しています。因みに第一回セミナーでは三〇〇人の参加募集に一一〇〇人の応募があり六〇〇の席を用意する盛況でした。同窓生としては久しく遠ざかった仙台での真摯な青春体験を回想する思いがあったのかも知れません。記念事業には「東北大学基金」の

創設、記念建造物、「大学百周年史」刊行等の構想や各種キャンペーンも予定されているようです。ところで記念事業を支える募金活動につきましては、すでに積極的なご協力を頂いている会員皆様には厚く御礼を申し上げます。しかし現状

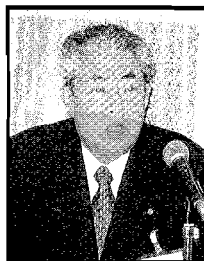
尚達成目標には距離があり、未だ募金にご参加頂いていない方々には何卒ご理解ご協力をお願い申し上げます。尚地区同窓会は幹事会承認により特別予算として十万円内の募金を決定させて頂きましたことをご報告申し上げます。

教育学部同窓会では菊地武烈会長が三月に退任され、代って荒井克弘学部長・研究科長が新会長に選任されました。(次頁に寄稿)

また昨年総会で「放送五十周年—その光と影」の講演を頂いた前放連専務理事の酒井昭会員が二月に急逝され、更に三月、地区同窓会発足以来の熱心な功労者河田喬夫顧問が逝去されました。痛恨の極みです。心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

酒井昭さんを悼む

大寄 晋
(社会、58年卒)



二月十八日付の新聞死亡記事には本当に驚かされました。大学以来の友人、酒井昭さん(元日本民間放送専務理事)の名があったからです。つい半年前に会っているし、病気はそれほど重いと知りませんでした。

酒井さんとは、昭和三十一年、教育社会学社会教育専攻でいっしょになりました。

東京の下町、両国高校出身ということで、東北出身の学生の多い中で、爽やかな語り口が印象的でした。

私共の専攻は、当時教職員のほかマスコミ関係に就職先をひろげていました。そんな事で同期九名中四名がその方面に進みました。

酒井さんの最初の就職先は、山形放送のアナウンサー。深味のある声でニュースを読んでいたのを覚えています。私も同系列の新聞

(次頁に続く)

青天の霹靂

東北大学教育学部同窓会会長
東北大学教育学部・教育学研究科長
荒井克弘

研究所、大学を転々としてきた吾が身にとって、大学の管理職など生涯無縁なものと思っていた。もとよりその任ではない。それがあろうことか、この四月から菊地武剋先生の後を受け、教育学部長・研究科長を拝命することになった。かつて「晴天の霹靂」と言った政治家がいたが、東北大学に着任して五年、東北大学の卒業生でも教育学部の出身でもない自分が、国立大学法人化後の、問題山積の時期に管理職を仰せつかると思わなかった。

工学部出身の自分が「大学研究」を志したのは安田講堂堂上に象徴される学生紛争のさなかである。「大学問題」がその後、に学問の一分野を形成するとは夢にも思っていなかった。荒唐した大学をみて教員にも学生にも言いようない憤りをもったのが正直な感想であった。当時、

大学問題の専門家はほとんどいなかったが、たまたま自分が在学していた東京工業大学にその道の先駆者となる永井道雄先生（元三木政権文相）がいらした。鬱々とした思いを永井教授にぶつけたのがこの道に入るきっかけとなった。

就任して半年、諸事雑多、歴代の学部長、研究科長がその中でそれぞれに輝かしい功績を残されてきたことを想い、非力な自分が現職を全うすることの難しさを痛感する。さて、この先輩諸賢に何か及ぶものがあるだろうかと自問する。……おそらく、大学改革の志と答える以外には何もない。それが専門を転じて大学研究をめざした初心であり、自分の誇りうる唯一のものだからである。



（前頁より続く）

社で記者をしていましたから。三年後酒井さんは日本民間放送に転じた。持ち前の熱心さでは放送倫理規準制定などの分野で活躍され、民間放送の生き字引きといわれ、頂点の専務理事まで勤められました。早く亡くなられたのは、誠に残念な事です。合掌

故河田喬夫兄に 想いを寄せて

長谷川 嵩
（社会、59年生卒）



手元に昨年の日誌がある。ちょうど今頃、十月の初旬に夫妻と岩手県境、栗駒山に行くべく車上の人となった。在仙の「バラ寮」のメンバーも合流しての旅であった。思えばこれが河田兄との最後の旅になってしまった。

これまでも、奥多摩、秩父はもと

より、遠くは八幡平、乳頭温泉、西は金沢、黒部溪谷、草津温泉等、昨年春には、高遠の桜を見に行つてきたばかりだった。全て奥多摩同伴であった。

今回も東北自動車道を北上、快適なエンジンの調べのうち、仙台を過ぎる辺りで三本木の街を見たいと言う河田兄、PAに入りしばし、街並みを眺めていたその横顔が寂しそうであった。三本木は少年時代を過ごした街とか。

花山湖で仙台組と合流、温湯温泉、栗駒山、須川高原温泉、小安峡温泉を経て、湯沢に入った。ここも一時過ごした街で、父君が医学部卒業後、勤務した市立病院を見たいと言う。建物を見上げる顔に一筋ひかるものを見たような気がした。長い時間のように思えたが、よし、これでもう思い残すことはないと言う河田兄、その胸中は如何ばかりだったかと思うと哀切の情がこみ上げて来て止まない。

今にして思えば、河田兄の身体は病魔との葛藤であったのか。

その兄も今は居ない。三本木、少年時代、川遊びをしたと言う鳴瀬川のせせらぎを背に天性寺（てんしようじ）の墓に父君と眠る。

父子で何を語りあっているのだからか。合掌